ふるさとの民話　（第三十八話）

『多根の麦太郎』

多根の村は、山間地にあり、冬が早く、春が遅い。農産物は、里より、よほどできなかった。

いつの時代か、村には、たいへん、辛抱強い男がいた。畑にまいた麦を、裸足で踏まえ、体温で発芽させていた。そして、りっぱな麦を作り、良質の麦種を産出した。以後、多根の村にも、りっぱに、麦を作れるようになった。

また、この男は、たいへん、ものぐさでした。足も洗わないで、田畑から家へ出入りをしていた。いつしか、この男の足に、麦が生え、すくすく、育ったという。以後、村のみんなは、この男のことを、「麦太郎さん、麦太郎さん」と、呼ぶようになった。

そして、村の子どもが、足を洗わないで、飛びまわっていると、その親たちは、「麦太郎さんのようになるぞ。」と戒めたという。

（多根町　伝承、山下郁雄　集録）

→